

## 特集「広報・アウトリーチ」

広報・アウトリーチは、惑星探査を救う鍵となる  
～「広報・アウトリーチ」特集に際して～寺園 淳也<sup>1</sup>

アウトリーチという、やや聞き慣れない日本語が、日本の科学の分野でよく聞かれるようになってきたのは、私の記憶では1990年代後半くらいではないかと思う。

アウトリーチ(outreach)という言葉は、もともと reach out という意味の方が自然で、これは、ただ待っているだけではなく、こちらから出て行くという形の意味である(手を伸ばす、という意味合いが近い)。特に、例えば地域における重要な事柄の合意形成(公共事業など)や、福祉分野などで実際に地域に出て支援活動を行うことなどがアウトリーチの本来の使われ方である。

広報とアウトリーチの違いはなかなか難しいが、例えば中須賀・川島[1]の考え方によれば、時間軸によって整理できるものである。広報は、ある特定の事柄についてすぐに伝え反応を得る(報道などにも関連する)、比較的タイムスパンの短い活動であるが、アウトリーチはもう少し長い、数日～数ヶ月の単位での活動となる(講演などもアウトリーチではあるが、その準備期間や周知などの期間を考えると数ヶ月単位の活動とみてよいだろう)。その分、よりじっくりと地域、あるいは市民に溶け込むことが活動として前提となる。さらにこのスパンが長くなってくると教育ということになり、こちらは数ヶ月、数年という単位をかけていくことになる。広報、アウトリーチ、教育は、このような形で密接につながっているのである。

科学分野におけるアウトリーチがとりわけ注目されてきた1990年代には、いくつかの契機となる事柄が存在している。

まず、巨大科学が一般的になってきたことが挙げられる。超大型の粒子加速器、大規模な遺伝子解読計画、そして我々の分野であれば月・惑星探査。いずれも数百億～数千億の費用を必要とする巨大プロジェクトである。このような巨大科学には巨大な税金が投じられ、往々にしてその使われ方は従来の科学に比べて見えにくい。必然的に市民がその用途についての説明を要求することも出てくる。あるいは市民の代表としての議員からの説明を要求されることもある。そのためには実際に計画に関わる科学者が市民の前に立ち、説明を行うことが求められるようになってきた。専門的な事項が多い科学技術の分野においては、専門的な説明を行えるのはやはり科学者に限られるのである。

もう1つはインターネットの普及である。インターネットにより情報の双方向の流通が担保され、ありとあらゆる種類の情報へ瞬時かつ簡単に誰もがアクセスできるようになった。市民に対してこれまで与えられて一方であった情報が、市民側からの発信も可能となったばかりか、市民が政策や社会の意志決定に対してより強力・直接的な影響力を持つようになった。ブログやソーシャルメディアという形で、これらの発信力・影響力はますます強化されている。さらに巨大科学に携わる科学者自身も情報発信の担い手となることができるようになり、新たな広報・アウトリーチの手段となっている一方、その発信方法や内容は日々競争や批評の対象となり、科学者は本来の研究という業務以外にも情報発信という大きな仕事を背負い込むようになってきている。

いまや広報・アウトリーチは分野間での競争の感を呈しており、各分野が、より魅力的なコンテンツ、より魅力的なキーワード、より魅力的な素材を求めて、

1. 会津大学  
terazono@u-aizu.ac.jp

いろいろな媒体を通した対外情報発信を実施している。それは、情報の浸透、すなわち市民による活動の理解が施策予算の獲得に直結していることを誰もが理解したからであり、巨大科学においては、予算の確保こそがそのミッションの死命を制することが明らかだからである。

惑星科学や惑星探査は、そういった点では広報・アウトリーチ活動では他分野に比べて一歩リードしているところがある。それは、宇宙という、一般の人がなじみやすい素材を対象にしていること、実施する諸機関が広報・アウトリーチ活動に古くから熱心に取り組んできていたこと、また、中にいる科学者や関係者もそのような活動に習熟し、また熱心に取り組んできていることが理由として挙げられるだろう。

ただ、惑星科学の広報・アウトリーチが総じて受け入れられやすい情報ばかりかというところでもない。難解な用語や複雑な科学理論は適切にかつ正確にわかりやすい表現に変換して伝えていく必要がある。探査においては、例えば探査が失敗した場合の危機広報という観点も考慮に入れなければならない。最新の情報を公表する場合も、関連する諸機関の意向に十分に配慮する一方で、世の中からのなるべく多くの情報の公開を求める要望も取り入れなければならない。

何よりもやはり他分野の追い上げが大きく、常に競争にさらされている環境下で、惑星科学や惑星探査の広報・アウトリーチ活動を「これでもう十分、やらなくてよい」というふうにはいえることはできない。広報・アウトリーチ活動は常に行い、常に成長する必要がある領域なのである。

今回の広報・アウトリーチ特集では、実際に惑星科学や惑星探査のアウトリーチに携わってきた方々による貴重な論文が多数寄稿された。これらの成果や意見は1つ1つが大変貴重であると同時に、また人々が惑星科学や惑星探査のどのような点に関心を持ち、あるいはどのような工夫をすれば人々の興味を引きつけられるか、という、アウトリーチの根源的な部分に大きな示唆を与えるものである。いますぐにでも活用できるノウハウとしての側面も大きいだろう。

ただ私は、これらの経験は次の段階に活かすべきだと考えている。

これまでの広報・アウトリーチは、良くも悪くも、そういった面に適する資質を持った人材の半ばボラン

ティア的な活動で進められてきた。その影響もあり、このような活動はサイドジョブ、ボランティア的な仕事であると認識している人は現在でも少なくないように見受けられる。

広報・アウトリーチはミッションや対象、タイムスパンなどによって手法も様々である一方、例えば話し方や展示パネルのフォントデザイン、表示の仕方といった、非常に細かい点が影響を与えるという点で、なかなか一般化しにくい側面があることは否定できない。しかしだからといって、いつまでもできる人に頼っていたのでは、広報・アウトリーチの裾野を広げていくことはいつになってもかなわないといえるだろう。

有効であった広報・アウトリーチ手法の中からそのポイントになった点を抽出する、ウェブのログやアンケートなどから抽出された人々の関心を見極めていく中で、今後重点的にアプローチすべきポイントやターゲットを認識する。このような科学的的方法論が今後の広報・アウトリーチには必要とされている。

私自身、いずれ広報・アウトリーチ自身は科学、あるいは技術的な方法論が確立されていくべきだと考えている。そしてそのような理論を確立できる分野として、この惑星科学や惑星探査の分野は非常に有望だと思っている。長年の経験と豊富な実績は実証グラウンドとしてふさわしいものであり、一方では「はやぶさ」帰還後のブームに代表されるように、人々の関心が非常に高い分野だからである。

修士や博士を出た若い研究者たちがこういった理論を身につけ、自らの研究や興味を人々により広く伝えられるようになれば、それはやがては惑星科学、惑星探査を救う重要な鍵になってくるのではないだろうか。「惑星科学科アウトリーチ学講座」があってもおかしいことはないのである。

繰り返しになるが、いまや広報・アウトリーチは競争である。例えば民間資金による惑星探査が始まったとして、今度は投資家や株主への説明責任という形でより効果的な広報・アウトリーチが求められることになる。小規模の研究であっても、博士号を取りたての若手科学者であっても、広報・アウトリーチの観点と無縁ではいけないのである。

本特集を通して、読者の皆様方がいま一度広報・アウトリーチの重要性を認識した上で、そのような活動へより一層の支援、参加をしていただくことを、今回

特集に携わった身として強く願うものである。

## 参考文献

- [1] 中須賀真一, 川島レイ, 2002, 第46回宇宙科学技術  
連合講演会。